

【单元 (die Einheit, unit)】

单元は、現在、「何時間かの授業のまとまり」「教材のまとまり」程度の意味でふつうに使われています。

しかしこれは墮落した概念だと梅根は言いました。单元は実は革命的な概念で、それが学校単位（！）で花開こうとしたのがコア・カリキュラム連盟（日生連の前身）の実践でした。戦後の新教育は、ほとんど「单元学習」とイコールとみなされていきました。「コアカリキュラム」問題は、どういう单元群を中心（コア）に配置するかという单元の問題でした。

教育での单元は、ドイツのヘルバルト派のチャラーによつて「方法的单元」として提唱され、アメリカにわたつて、アメリカヘルバルト派、パーカー、デューイ、キルパトリック

と展開し、日本に渡つて、コア連が継承発展させました。この過程で、单元は子どもたちこそが主体的につくつていく経験のひとまとまりになっていきます（正確には濃淡はあつても〈教師とともに〉）。

ドイツ語でアインハイト (die Einheit) ですが、こ

生活教育 キーワード

れは《一（いち）》、《単位》、《はじまり》という意味があつて（ein-は英語の one）、哲学で長く議論されてきた《一と多^ち》の問題の一面面です。单元は、いつも他の《多》とのつながりでとらえなければならぬのです。英語だと unit（ユニット）ですが、こ

の仲間の unity（統一）、unite（つなげる）、universe（ひとまとまり・普遍・全体・宇宙）と並べるとそれらの意味を含み持つてい

ることがわかります。单元がつながつて、〈教科〉に取つて代わつていき、ついには〈カリキュラム〉を内部から打ち崩して〈新しい生活〉をつくりだしていく構想だったのです。〈細胞〉が生きて分化成長するイメージと重なります。

（研究部・加藤聡二）

文献①

『单元』（梅根悟教育著作選集4）明治図書、1977年所収。原著は1951年。絶版。

文献②

倉沢剛『米国カリキュラム研究史』風間書房、1985年。大著、高額。